

## 貝原益軒の《身を修むる工夫》

— 『大和俗訓』における自己形成のテクニク —

Techniques for Self-formation in a Japanese Confucianist Instruction of the beginning of 18c.

近藤 哲郎

### 序

本稿の目的は、通常近世前期に位置づけられる儒者貝原益軒（1630～1714）の教訓書、特に『大和俗訓』（1708）において提示された自己形成のテクニクを明確にすることにある。自己形成のテクニクとは、自己を《修める》ために自らの思考・行為・身体等に対して働きかけることが意図された自己への実践であって、このようなテクニクの組み合わせ如何によって一定の自己のあり方が規定されるものとして定義できる。本稿は、自己形成のテクニクという水準において、貝原益軒そのものの自己形成の論理、またより全般的な近世前期における自己形成に関する問題化、そして現在へと至る自己形成史の展開を現存する資料に即して明確に跡づけ、われわれの自己形成のあり方を歴史的に究明しようとする系譜学的研究の出発点である<sup>①</sup>。それでは、貝原益軒によって勧告された自己形成のテクニクとはどのようなものか、まずその勧告（advice）における基本的な論理を一瞥した上で、《身を修むる工夫》としての《学問》から検討しよう。

### 1 道理を知るべし

貝原益軒の勧告の基本的な論理とは、万事万物に備わった理（事物や状況に本来的なメカニズムであり、同時にわれわれの実践すべき道として現れる）を見極め、その《道理》にかなった実践を、過ちなく実践せよというものである。

たとえば、家の経営には家の経営という事態に固有のメカニズム、すなわち《理》が存在する。そして、それは同時に家を保持するためにわれわれが実践すべき《道》として現前する。同様に、人には本来的に身に備わった理が存在する。それが人として実践すべき道（その理念の現実化された様式が《礼》、すなわち作法<sup>②</sup>）である。「人に交われれば君臣・父子・兄弟・夫婦・朋友の間行なうべき道あり。また我が身の万のわざに皆一定の道理ありて、暫時もこの道を離れがたし」<sup>③</sup>。したがって、自己を修める工夫の根本は、このような人として本来備わっている道理をよく知りわきまえることにある。そして、「道を知りて行なうの工夫」としての学問は<sup>④</sup>、このような自己形成のテクニクの最も基本的な構成要素として位置づけられるのである<sup>⑤</sup>。それでは、学問の手順とはどのようなものか。

#### ① 学問の法

学問の法の要諦は、数かぎりなく存在する天下の道理を博く学び、よく思案して自得し、十分に実践するにある。まず、聖賢の書を学び、あるいは人に問うことによって、人として実践すべき道をはじめ、万事について広く古今の道理を探求すべきである。さらに学んだ道理を十分に思案して、心中に合点しわがものとした上で、力をつくして実践すべきである<sup>⑥</sup>。道理を知るといふ学問的实践は、自己の日常的な活動（あるいは自己形成）に役立つものでなければ

意味がない（学問の目的は君子になることである）<sup>7)</sup>。したがって、書を読む場合にも必ずわが身に受用すること、すなわち「書に記せる聖賢の教えをわが身にうけ用いて、守り行ない用に立つる」ことを心がけるべきである<sup>8)</sup>。深く自得した知であれば必ず実践されるはずである（実践されなければ真の知ではない）。また、実践することによって道理への理解もさらに深まるのである。「知れば行いやすく、行えば知りやすし。二の者互いに相助けて、道明らかに進む。たとえば道路をゆくが如し。道を知らざれば行きがたく、行かざれば行路を知りがたきが如し」<sup>9)</sup>。

## ② 日新（日に新たにす）の工夫

ところで、道を知り実践するための知の獲得ではあるが、「理を究むるも事を知るも、一重にものを思うべからず。幾重にも理をきわむべし」と勧告される。物事の一重を知りただけで、十分に道理をきわめ尽くしたと考えるのは浅はかである。「今日一重を去りて、明日また一重を去り、日々かくのごとくすべし。皮をつくして肉を見、肉をつくして骨を見、骨をつくして髓を見るべし」である<sup>10)</sup>。このように漸進的な道理の探求が日々新たに要請されるのだから、道は「知ること至りて難き」道となる<sup>11)</sup>。したがって、人は「ただわが知の暗く、わが徳の進まざることを憂い」つつ<sup>12)</sup>、「昨日の古き悪を改めて、今日新しく善にうつり、今日は昨日に勝りて新しくなる」という日新（日に新たにす）の工夫を心がけ<sup>13)</sup>、終生学問（人となるべき道を学ぶこと）を怠るべきではない。「学は終身のことなり、一息もいまだ残れる内は、この志怠るべからず。これ人の一生の間のつとめなり」<sup>14)</sup>。要するに、学問は自己を修めるために道理を知るといふ根本的であると同時に、生涯にわたっ

てその永続的な実践が要請される自己形成のテクニックなのである。

## 2 善につとむべし

人の身に備わりたる理を知れば、事の善悪をわきまえ知ることができる。その上で善を実践せよというのが聖賢の教える人としての道である<sup>15)</sup>。「人と生まれては、道に志して、常に仁を心にたもちて、毎日人に利益ある善事を行なうべし」。善を行なうとは、自己の利心を去って、ただ人の利益になることを行うにある。すなわち主君・父母・舅姑・兄長などによく仕え、家人〔妻子・使用人〕を愛するばかりでなく、人をめぐみ救うあらゆる実践、たとえば人の憂いを憂い、その喜びを喜び、人の飢えたるを救い、凍えたる人に衣を与え、道橋を修理し、人に害あるものを除き、人の中を和らげ、妄りに人に怒らず、人を恨まず、仮にも人をそしらず、侮らない等々といった実践である<sup>16)</sup>。

ところで、このような善の実践は、毎日毎日、折節につけて、常に心を用いて行なうべきもの、つまり「常につとめて止まざるべき」実践である一方で<sup>17)</sup>、必ずしも容易なものとは考えられていない。すなわち「善をするは、上り坂をのぼるが如し、つとめざれば為し難し」。それゆえ、力を用いてつとめ行なわざるをえない実践でもある<sup>18)</sup>。この善をつとめ行なう工夫として、互いに関連しつつも微妙に異なる次の二つの実践が勧告される。

### ① 善心をおしひろむる工夫

仁は人をあわれみ物を育てる善心であり、人ごとに生まれつきたる本心である。だから「人の心、必ず仁義礼智の性〔本性〕ある故に、良心時におこる。その良心を空しくせずして広め充つべし」。すなわち、「善心のわずかに起こるを損なわずして、育て養い盛んならしめ、その

分量を十分に充てて〔いっぱいにして〕、いづくにも行きわたらしむ」べきである<sup>99</sup>。たとえば、蟻を踏み殺すことを恐れて、蟻の集まっている所をよけて歩くのは、「その心善心なりというべし。この心をおしひろめて、まず父母兄弟を愛し、人倫〔人々〕に及ぼし、次に万物に及ぼさば、仁愛の道はひろく行なわ」れるだろう。「善心をおしひろむる工夫、常にかくの如くすべし」である<sup>100</sup>。

### ② 仁に至る工夫（恕の工夫）

仁者は自分を愛する心を以て人を愛するがゆえに、人我〔他者と自分〕の隔てがない、私がない。だから人をめぐみあわれむという仁の実践は努めずして行なわれるだろう。しかし、いまだ仁者の心に至らない者は、つとめて仁を実践しなければならない。それにはまず「人の心もまたわが心に変わらず。わが好むことは人も好み、わが嫌うことは人も嫌う」ということが前提である。その上で、「仁を人に施し行なわんとせば、まずわが心を以て人の心をおし量り、わが好むことは人に施し与え、わが嫌うことは人に施さ」ないようにすべきである。このようにすれば、「人の心になわぎることなくして、人々各々その所を得て安んず。これ仁の行なわるるなり」。これを《己を推して人に及ぼす》といい、恕という。「恕は仁に至らんとする人の行なうべき工夫」である<sup>101</sup>。

### 3 過悪を去るべし

しかし、いくら人には本来的な善心があるとはいえ、やはり多くの人に行ないには万事について過ちと悪とがある。過ちとは善悪を知らずに、あるいはそれには気づかずに理に違ふことであり、悪とは善悪を知りながら欲にひかれて理に違ふことである<sup>102</sup>。しかも、「心を正しくし、

道を行なわんとすれども、これらの過悪ありて去らざれば、徳に進むべきようなし。たとえば、田を作るに莠〔はぐさ：水田の稲を害する雑草〕を去らざれば、水を注ぎ肥やししても、莠のみしげりて苗に益なし。まず莠を去り水と肥やしを用ゆるがごとし」である<sup>103</sup>。要するに、自己を修めるには、まず自らの過悪を去るべきである。「聖人は過ちなし。賢者以下は過ちなきことなし。ことに凡人は過ち多し。何ぞ今の世に過ちなき人あらんや。・・・もし自ら修むる人は、過ち多きことを知るべし。自ら省みてわが過ちを知り、人の諫めを聞きて、わが道を改め善にうつるべし」<sup>104</sup>。

ところで、人が過ちや悪を行なう理由は、概ね気質の偏りと人欲を恣にすることにあるとされる<sup>105</sup>。「人の性はもと善なれども、およそ人は気質と人欲に妨げられて善を失う」。気質とは生まれつきであり、「気の荒きと騒がしきと、また柔らかすぎると弱きと、あるいは早すぎると鈍くゆるすぎたるの類、あるいは生まれつきに怒り多く、欲多きの類をいう」<sup>106</sup>。また、人欲とは耳・目・口・鼻・形〔身体〕の好む所がわがままで、ちょうどよい程度を超えること、つまり「目に非礼を見て色に染み、耳に非礼を聞きて声淫にまよい、口に非礼を言い、飲食を恣に貪り、鼻は香をめで、形〔身体〕は怠り、あるいはなすまじき仕業を為すは、皆これ人欲」である<sup>107</sup>。そこで、わが身の過悪を去るために、気質の悪しき癖を改め、人欲（特に怒りと欲）の妨げを去ることを目的とした次のような実践が勧告される。後者から見ていこう。

### ① 人心を抑え道心を主とする工夫（惟精惟一の工夫）<sup>108</sup>

人心とは人欲、すなわち身体の基本的な欲求と喜怒哀楽愛憎欲の七情であり、これらは人情

としてなくてはならないが（聖人といえども人心なきことあたわず）、往々にして「ほどよきことを忘れ、たちまちに私欲にながれ悪に陥る」傾向がある。道心とは仁義礼智の本性よりおこる善心だが、通常人心は盛んになりやすく、道心はかくれやすい。したがって、「二の者、胸中に相まじりて、そのおさめようを知らざれば、人心はいよいよ危うくして人欲にながれ、道心はいよいよかすかにして、ついに人心に覆われてほろぶ」。そこで、「人心を抑え、道心をたもつ道なくんばあるべからず」である。

その手法は、まず胸中の「人心・道心二の間をわかつて、明らかに精しく知る」ことである（惟精）。そして、すでに人心と道心を明確に区別して把握したならば、次に「専一に道心を主として、人心の危うき方にまかせざる」こと、つまり人心をそのままには放置しないことである（惟一）。たとえば、酒食はちょうどよい程に食らえば身を養うが、それを過ぎれば身を害う。この過不及なきよき程が中であり、道のあるところである<sup>93</sup>。ところで、酒食を好むのは人心であり、身を害うことを恐れて酒食を過ぎすべからずと思うのは道心である。もし酒食を好む心を放置すれば、たちまち酒食を恣に過ぎ、道心（善心）があるとしても人欲には勝てない。そこで、「すでに酒食の過ぎて損あり、節にして益あることを精しく知」っているのだから、自らの思考の中で人心と道心の別を明確に把握して迷わず、「専一に慎みて道心を主とし、人心の貪り好む欲をいましめ抑えて、自ずから過不及のあやまりをなからしむ」のである。これが惟精惟一の工夫であり、「心によく思案して、義理に当たるか当たらざるかを考え行なう」ことによって<sup>94</sup>、人欲を抑え道心を主とする工夫である。

## ② 堪忍の工夫

しかし、人欲を抑え道心を主とするとはいえ、七情のうちでも最も害の多いとされる怒りと欲は<sup>95</sup>、容易に抑えうるものではない。「怒りは強く欲は深きゆえに、これに勝ちがたし」。もし堪忍の工夫がなく、怒りと欲に勝つことができなければ、よく思案することも、道心を主とすることもできるはずがない。したがって、力をつくして堪忍すべきである。「力弱ければ、怒りと欲に勝ちがたし」。それゆえ「怒りと欲の心起こるを断ち去ること、刃を以て切り断つが如くなるべし。・・・また敵に向かいて戦うが如く、十分の力を用ゆべし」と勧告される<sup>96</sup>。

ただ、すでに盛んになった欲には勝ちがたいとしても、はじめて欲の起こるきざしに勝つことは容易である。「欲のはじめて起こる時、早くふさげば、力を用うること少しにて、その験多し」<sup>97</sup>。怒りに関してもまた同様である<sup>98</sup>。したがって、一般に「常に心の内を省みて、一点の私欲邪念あらば、早く去るべし」となる。私欲とは名利色貨の欲と耳目口体の好む所を恣にする欲であり、邪念とは怒り、争い、ほこり、侮り、そねみ、そしり、へつらい、欺き、偽り等に関連する観念であるが、「もしこれらのことつゆばかりもあらば、すみやかに去るべし」なのである<sup>99</sup>。

## ③ 気質を変ずる工夫

人欲を恣にすることが悪の幹ならば、気質の偏りは悪の本である<sup>100</sup>。しかも、「生まれつき〔気質〕悪しければ、人欲行なわれやすし」であるから、人の過ちは必ず気質の偏りより起こるということもできる<sup>101</sup>。したがって、「わが気質の悪しき所を自ら察し、人に言わせて聞き、その偏りなる悪しき所に勝ちて改め去る」ことが、自己を修める実践にとってきわめて重要と

なる。「生まれつきての偏りなる所にまかせぬれば、心正しからずして、身おさまらず。……氣質の偏りの害となること、たとえば田を作るに莠〔はぐさ〕あるがごとし……」である<sup>83</sup>。

ところで、「氣質の悪しきを変ずる道は、己が過ぎたるを抑えて、足らざる所をつとむ」るにある。「強すぎたる人は柔らかなるべし。弱き人はつとめて励むべし。早過ぎたる人はゆるやかなるべし。鈍き人はつとめて鋭に行なうべし。……かようにわが悪しきを改むるに志あらば、いかに偏性なりとも、などか氣質を変ぜざるべき」である<sup>84</sup>。「君子は氣質の偏悪なし」。だが「氣質を変じ改むるはきわめて難い。常に心を用うべし」<sup>85</sup>。

#### 4 樂を失うべからず

さて、「およそ善をすれば、わが心こころよく、人もまた喜び随う。また楽しからずや」というように、道理の実践によって得られる「楽しみは、人の心に生まれつきたる天機〔天賦の性質〕にして」、人に本来的に備わった理である<sup>86</sup>。したがって、人は酒食等の俗樂を自らの外に求めるのではなく、「ただ善を行ない、道にしたがうを以て樂とすべき」である<sup>87</sup>。また、人欲にひかれてこの樂を失うことは道理に違ふこと（つまり過ちであり悪）であるから、「いかなる横逆にあい、不幸にあうとも、常にこの樂を失う」べきではない。そこで「愚人にも、各々生まれつきたる樂あることを知りて、樂を失わざる工夫あるべし」となる<sup>88</sup>。

樂を失わざる工夫（うれいなき工夫）はいくつも勧告されている。(a)自分の力ではどうにもならないことは、ただ天命に任せるべきである。仮に自らは善を行なっても禍〔わざわい〕が生じたならば、これもまた天命であって、憂うべきではない。(b)自分がなんらかの禍にあつて

も、なおそれよりもひどい禍にあった人と思いくらべて、自分の心を慰めるべきである。(c)人が自分に不仁無礼な行いをしたとしても、なにか理由があるのだろうか、人の心とは概してこのようなものだから、道理に合わないことが多いのは世の中のならいだと考えるようにして、人を非難したり世の中を恨むべきではない。要するに、「世に居るには、人情を知り、時變〔時世の変化〕を考えて、天命に安んずべし。……わが生める子、わが禄を与うる奴〔使用人〕だに、わが心のままになりがたし。況や世の人の心、さまざまに変われば、わが思うままに随いがたし。畢竟ただわが身をおさめて、人を責めざるべし。これ世に居るの道なり」である<sup>89</sup>。

ところで、これらの実践の中で最も強調されているのが、最後に検討する《わが身にかえり求むる工夫》、つまり《自反》である。

#### ① わが身にかえり求むる工夫（自反）

もし人の悪しきのみをとがめて、自らを省みることがなければ、怒りや恨みばかりが多くなり、人と争うだけでなく、自分の心も苦しみが多く樂を失うことになるだろう<sup>90</sup>。そこで、「人われにしたがわず、われに背かば、わが過ちを責めて、人をとがむべからず」。つまり、人に求めるのではなく、わが身に善を求めるべきである<sup>91</sup>。たとえば、「人を愛して、人われを親しまずば〔へだてなく交わらないようならば〕、わが愛のいまだ至らざる故と想うべし。人を礼して人われに無礼ならば、わが礼いまだ至らざる故と想うべし。人を治めて治まらずんば、わが智の至らざる故と想うべし」<sup>92</sup>。もしわが身に省みて自分に過ちがないとしても、やはり「わが行いのいまだ至らざる故を思い、人を責むべからず、怒りそしるべからず」。これが自反であり、「わが身にかえり求むる工夫」である<sup>93</sup>。

しかし、もし自らを省みれば、自分にも過ちが多いに違いない。だから、常にわが身を省みて自分の過ちを責めることに集中するのであれば、「人の過ちをとがむるには暇なかるべし」である<sup>64</sup>。しかも、人を責め外に（人に）道理の実践を求めることは、自らの道理の実践（自己形成）とは何の関係もない。「わが身に道を求めべし。実をつとめて、外を願う心あるべからず」と勧告される所以である<sup>65</sup>。要するに、わが身にかえり求むる工夫（自反）とは、世の交わりの只中であって、「和して流れず」、確たる自己形成を目的とした《身を修むる工夫》そのものにほかならないのである。「心気和平にして人をとがめず、わが身にかえり求め、己を責むれば、身おさまりて楽多し。・・・常にこれを以てわが心をおさむべし。もしこの工夫を忘れれば、必ず道を失い楽を失う」<sup>66</sup>。

注

- (1) 本稿で用いる方法論上の概念については、拙稿「フーコーの経験的分析手法—歴史を用いる社会学的経験分析の一形式」『ソシオロジ』1994—5年、v. 39—1、41p—58pを参照。
- (2) 貝原益軒「大和俗訓」『益軒全集 卷之三』1911年（以下『全集』と表記）、139p上。石川謙校訂『大和俗訓』岩波文庫1938（以下『文庫』と表記）、169p。
- (3) 『全集』68p上、『文庫』72p。なお引用文については、読みやすさを考慮し、またわれわれの理解をできるだけ明確に示すために、文意を損なわないと判断できる範囲で表記を改めた。原文については原本を参照願いたい。
- (4) 『全集』56p下、『文庫』56p。
- (5) 以上については次も参照。『全集』47p下—48p、65p下—66p上、137p上。『文庫』44p—45p、69p、166p。また、源了圓「朱子学派の実学観

- と理の観念（1）貝原益軒の場合」『心』平凡社、1976年、29（2）、21p—33pも参照。
- (6) 『全集』56p下—58p上、『文庫』56p—58p。
  - (7) 『全集』71p、『文庫』77p。それ以外にも次を参照。『全集』52p下—53p、67p上、77p上。『文庫』51p—52p、71p、84p。
  - (8) 『全集』60p、『文庫』61p。
  - (9) 『全集』141p、『文庫』172p。また以上については次も参照。『全集』56p、62p下、66p下—67p上、70p下—71p上、73p、146p下。『文庫』55p—56p、64p、70p、75p—76p、79p、179p—180p。
  - (10) 『全集』59p下、『文庫』60p。
  - (11) 『全集』74p上、『文庫』80p。
  - (12) 『全集』58p下、『文庫』59p。
  - (13) 『全集』62p上、『文庫』63p—64p。
  - (14) 『全集』72p上、64p下。『文庫』77p、67p。
  - (15) 『全集』54p下—55p上、65p下—66p上。『文庫』53p—54p、69p—70p。
  - (16) 『全集』134p、87p下。『文庫』163p、99p。
  - (17) 『全集』136p下—137p、146p上、148p。『文庫』166p—167p、179p、182p。
  - (18) 『全集』148p下—149p上、『文庫』183p。
  - (19) 『全集』82p上、『文庫』91p—92p。
  - (20) 『全集』106p下—107p上、『文庫』125p。
  - (21) 『全集』83p下—84p上、『文庫』94p。
  - (22) 『全集』123p上、『文庫』148p。
  - (23) 『全集』81p、『文庫』91p。
  - (24) 『全集』123p上、『文庫』148p。
  - (25) 『全集』147p下、『文庫』181p。
  - (26) 『全集』54p、81p上。『文庫』53p、90p。
  - (27) 『全集』96p下、『文庫』110p。
  - (28) 『全集』78p下—80p上、『文庫』87p—88p。
  - (29) 『全集』91p上、『文庫』103p。
  - (30) 『全集』96p上、『文庫』110p。
  - (31) 『全集』90p下、『文庫』103p。

- (32) 『全集』134p上、101p下～102p上。『文庫』162p～163p、118p。
- (33) 『全集』93p上、90p下。『文庫』106p、102p。
- (34) 『全集』102p下～103p上、『文庫』119p。
- (35) 『全集』81p上、『文庫』90p。
- (36) 『全集』147p下、『文庫』181p。
- (37) 『全集』54p上、123p下。『文庫』53p、148p。
- (38) 『全集』72p、『文庫』78p。
- (39) 『全集』102p上、『文庫』118p～119p。
- (40) 『全集』72p下、136p下。『文庫』78p、166p。
- (41) 『全集』135p下、105p下、100p上。『文庫』165p、123p、116p。
- (42) 『全集』135p上、『文庫』164p。
- (43) 『全集』105p下～106p上、『文庫』123p～124p。
- (44) 『全集』94p上、109p上、99p上、94p下、154p上、159p下、161p下。『文庫』107p、128p、114p、108p、190p～191p、198p、200p～201p。
- (45) 『全集』162p上、『文庫』201p。
- (46) 『全集』151p下、『文庫』186p。
- (47) 『全集』125p下、『文庫』151p。
- (48) 『全集』151p下、125p下。『文庫』186p、151p。
- (49) 『全集』155p上、93p。『文庫』192p、106p。
- (50) 『全集』164p上、『文庫』204p。
- (51) 『全集』108p下、『文庫』169p、127p。